

巻 頭 言

2020 年より 2 年半の間、新型コロナウイルス感染症には新たな変異株が次々と確認され、その度に感染の波が押し寄せてきました。今年に入ってオミクロン株による第 6 波が勢いを増した 2 月下旬にはロシアのウクライナへの侵攻が始まりました。現在もまだ悲惨な状況が続いています。そして第 7 波の感染はこれまで以上に拡大し、国内で新規感染者が 1 日 25 万人を超えるまでに増加しています。重症者は少ないとはいえ、感染拡大により職員本人の感染やご家族の感染に伴う自宅待機者も増加する中、救急受入を止めることなく従来の医療とコロナの医療を両立し地域医療の維持に努めているところです。



加古川中央市民病院は 2016 年 7 月の開院以来、消化器センター、心臓血管センター、こどもセンター、周産母子センター、がん集学的治療センターの 5 大センターを中心に高度専門医療を実践してまいりました。コロナ禍においても各診療科において高度専門医療の提供を継続し、病院の総合力で救急医療に取り組むことで救急車受入件数や地域救急貢献率はコロナ禍以前よりも増加しています。当院の特徴でもある小児・周産期領域では圏域を越えたコロナ患者さんの受け入れに幅広く応えてまいりました。がん診療においては、がん集学的治療センター（手術療法室、放射線療法室、薬物療法室、がん緩和ケア室、がん相談支援室）を中心に診断と治療の充実をはかり、国のがん診療連携拠点病院（高度型）の指定を受けることもできました。また、看護師の特定行為の研修施設として認可を受け、4 月から特定看護師の育成に着手しているところです。学会発表、論文作成については、これまでも部署毎に熱心に取り組んできましたが、この度初めて科学研究費助成事業 新規「若手研究」に一題採択されました。今後も臨床、教育はもちろん研究にも力を入れていきたいと考えています。

2022 年 6 月には、新型コロナウイルス感染症への対応を含め地域医療の確保及び向上への貢献と健全経営に対して全国自治体病院開設者協議会及び全国自治体病院協議会の両会長表彰をいただくことができました。行政、地域の医療機関や介護施設ならびに地域住民の皆様のご理解とご協力のおかげであり、改めまして感謝申し上げます。

加古川市民病院機構学術誌第 11 号には、2021 年度の病院概要並びに職員の論文や学会発表などの研究業績が盛り込まれています。ご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

2022 年 8 月

加古川市民病院機構 理事長
加古川中央市民病院 院長
大西 祥 男